

主 題：神によるさばき ④ (コラ)

聖書箇所：ユダ11節

新約聖書ユダの手紙11節をお開きください。

このタイトルが教えるようにユダという人物がこの手紙を記しました。ではユダとは一体だれなのか——。主イエス・キリストの異父兄弟、同じ母から生まれて来ているわけですが、イエス・キリストは聖霊によってみごもり、ユダはヨセフによってみごもったわけです。彼はこの手紙を通して、これから必ず教会にはにせ教師が入り込むのだと教えます。正しい教えを曲げて、人々を混乱に導くような人々が入り込むのだという警告を与えています。そして警告とともに、既にそういう人々が実際に教会に入り込んでいるのだとユダは指摘しています。

◎ にせ教師の特徴

まず4節のみことばに「**というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。**」とあります。教会の中にこうしたにせ教師たちが入り込んで来たと言っているわけですが、「**彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。**」と記されています。このにせ教師たちの三つの特徴をユダは教えてくれています。

① 神を恐れない：「不敬虔な者」

一つ目は、彼らは「**不敬虔な者**」、つまり神を恐れぬ者たちです。この「**不敬虔な者**」ということばは信仰とか信仰の歩みに全く気をとめることなく生きている人たちのことです。神を信じるとか、神に従うということに全く無関心で好きなように生きている人たちのことです。そういう人々をここで「**不敬虔な者**」と記されています。

② 道徳的に汚れている：「神の恵みを放縱に変えた」

二つ目に彼らは道徳的に汚れた者たちです。「**神の恵みを放縱に変えた**」とあります。ここで使われている「**放縱**」ということばは肉欲にふけるとか、性的快楽にふけるとか、ふしだらな生活をするとかいう意味です。ですから、神様が教えるようにきよく歩んで行くのではなくて、自分の性的な快楽を満たすために好き勝手な生活をしている人々だという特徴をユダは教えます。

③ 教理的に誤っている：「イエス・キリストを否定する人たち」

三つ目は教理的に誤っています。神様の真理から外れていると言うのです。「**イエス・キリストを否定する人たち**」であると記されています。

「**唯一の支配者**」ということばと「**主**」ということばを注意して見てください。この二つのことばをもってユダはイエスが一体だれなのかということを確認に教えています。「**唯一の支配者**」ということばは、すべてにまさる権威をお持ちの方、また完全な力を持っておられる方を表すことばを使っています。またこのことばは奴隷の所有者、奴隷の主人を表します。ですからまずイエス様はすべての権威にまさっておられ、完全な力を持っておられる方、そして罪から解放されて、神の奴隷である私たちの支配者であると教えます。そういうお方であることをユダは最初に教え、二つ目に「**主**」と言うのです。これは神であるとか救世主に対する称号です。ですからイエス様とは、すべてにまさる権威をお持ちの方であり、まことの神であり、唯一の救世主なのだと言っているわけですが、ユダは言うわけです。

でもこのにせ教師たちは、そういったものを否定するのです。そして、このにせ教師たち、背教者たち、こういったいろいろな人々が教会の中に入り込んで来て、教会の純潔というものを汚して行くわけですが、彼らがどういう人々なのか、ユダはそのことを教えてくれました。彼らは生き方において罪に染まっているだけではない、彼らの教理自体が真理から外れていると言うのです。どの時代であっても、にせ教師たちが教会の中に入り込んで来て、教会を混乱させようとします。もしその教師たちが罪の中を生きているならば、またその教師たちがイエス・キリストが神であることを否定するならば、にせ教師たちです。そういったカルトは我々の周りにたくさんあります。皆さんの家を訪問するグループもイエス・キリストが神であることを否定しています。みことばによれば、彼らはにせ教師たちです。イエス様はそういう人々が教会の中に入り込むということを警告し、そしてユダ自身がもう既にそういったことが起こっているのだと、この手紙の中に記しています。

◎ ユダが教える神のさばき

さて、ユダはこの手紙の中で、こういった神に逆らう人々、神に対して罪を犯し続ける者たちに対する神のさばきというものを警告しています。しかも彼はこれまでに起こった四つのことを用いて語りま

す。

① 荒野でのさばき

まず最初に彼は5節で荒野でのさばきの話をしています。モーセがイスラエルの民をエジプトから率いて約束の地へと向かっていました。ところが民は罪を犯して神からさばきを受けた。

② 罪を犯した天使たちへのさばき

6節には罪を犯した天使たちの話が記されています。彼らも神によってさばきを受けました。

③ ソドム・ゴモラのさばき

三つ目に出て来るのは、7節のところにソドムとゴモラの話です。既に我々が学んだように彼らの罪を神様はおさばきになった。

④ カイン、バラム、コラへのさばき

四つ目に出て来るのが11節「忌まわしいことです。彼らは、カインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのようにそむいて滅びました。」と。ここでユダは彼らに対する神様のさばきを引き合いに出して、必ず神の審判が下るのだと、必ず罪はさばかれるのだということを警告するわけです。

このカイン、バラム、コラの中で、カインはよくご存じだと思いますが、ほかの二人は余りなじみがないかもしれません。カインは神の前に神が喜ばれないいけにえを持って来た人物です。そしてさばきを受けます。

バラムの話は民数記22-24章に出て来ます。モアブの王バラクがイスラエルがやって来る様子を見て恐れ、預言者を呼んでイスラエルを呪ってもらえば、イスラエルは戦いに敗れるだろうと考えて、呼んで来た預言者がバラムです。ところがバラムはイスラエルを呪うことはしませんでした。ただ彼に問題があったのです。彼はバラクのところに出て行こうとしました。なぜかという、そこには富に対する誘惑があったのです。そのことはⅡペテロ2:15にも出て来ます。富に心が動かされてしまって神に対して従順ではなかった、その人物の名前がここに出て来ています。

★ コラ 民数記16章

そして、最後を見ると、「コラのようにそむいて滅び」たと書いてあります。コラと250名のユダヤ人のリーダーたちが神によってさばかれました。なぜ彼らは神のさばきを受けることになってしまったのか、旧約聖書の民数記16章を開いてください。残念ながら16章の全部を細かく見ることはできないので、大きなイベントだけ見て行きます。一体何が起こったのか、しっかりとつかんでいただきたいと思います。

1. 「モーセとアロンに対する反抗」：彼らの罪

まず最初1-2節に「:1 レビの子ケハテの子であるイツハルの子コラは、ルベンの子孫であるエリアブの子ダタンとアビラム、およびペレテの子オンと共謀して、:2 会衆の上に立つ人たちで、会合で選び出された名のある者たち二百五十人のイスラエル人とともに、モーセに立ち向かった。」とあります。コラを中心としたこの人々は、民のリーダーであるモーセとアロンに反抗したのです。今、我々はモーセがだれであり、アロンがどういう人であるかよく知っています。神が立てられたリーダーでした。神が彼らを通してすばらしい働きをなされた。ところが、人々は神がお立てになったすばらしいリーダーに反抗したのです。一体何がコラと彼らのうちに起こったのかです。もちろんそれは罪なのですが、彼らのうちにどういうことが起こっていたのか、聖書は我々にそれを教えてくれます。

1) ねたみ 3節

まず一つ目に、コラのうちにはねたみがあったのです。3節「彼らは集まって、モーセとアロンとに逆らい、彼らに言った。『あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、主がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、主の集会上に立つのか。』」、彼はなぜ私ではなくてモーセとアロンなのかと言います。自分もモーセやアロンのしている働きにふさわしいはずだと考えているわけです。ですから彼は「全会衆残らず聖なるもの」、みんな聖なるものだと言うわけです。なぜあなたたちだけが私たちの上に立つのかと。だから彼は「分を越えている」、モーセ、あなたは自分の立場、身分をわきまえていないと彼は発言するわけです。神が立てられたリーダーたちに対する尊敬の念を見て取ることが全くできません。その背後にはモーセがやっていることは自分もできると。確かに神の前に我々みんな罪赦されて救われた者で平等です。でも神様はそれぞれに特別な務めを与えてくださった。彼らの問題は、神が立てられたリーダーに対する尊敬の念が全くないことと、自分がその務めについていないことをねたんだことです。

2) 不満 8-11節

二つ目の問題は、彼らのうちには不満がありました。モーセたちをねたんだだけではなく、彼らは自分たちに与えられた働きに不満を持っていたのです。8節「:8 モーセはさらにコラに言った。『レビの子たちよ。よく聞きなさい。:9 イスラエルの神が、あなたがたを、イスラエルの会衆から分けて、主の幕屋の奉仕をするために、また会衆の前に立って彼らに仕えるために、みもとに近づけてくださったのだ。あなたがたには、これに不足があるのか。』」、コ

ラには神様からすばらしい働きが与えられていたのです。しかし、不満だった。10節「こうしてあなたとあなたの同族であるレビ族全部を、あなたといっしょに近づけてくださったのだ。それなのに、あなたがたは祭司の職まで要求するのか。」、自分たちに与えられたすばらしい働きがあったにもかかわらず、なぜ我々はモーセたちのようにリーダーではないのか、なぜアロンとその子孫のように祭司ではないのか、我々も祭司になれるはずだ、祭司になりたいのだという思いを持っていました。11節に「それだから、あなたとあなたの仲間のすべては、一つになって主に逆らっているのだ。アロンが何だからといって、彼に対して不平を言うのか。』と。このコラという人物はレビ人でケハテ族の一員でした。民数記4章を見ると、ケハテ族の30～50歳までの者には「最も聖なるものにかかわる」務めというものが与えられていたのです。その当時神殿は存在せず幕屋でした。自分たちが移動する時にそこに幕屋を移動させたわけです。祭司は、幕屋の中ですべての大切な器具に覆いをかける務めです。その後、コラたちはその器具を次のところまで運び出して行くという務めを神様からもらっていたのです。非常に大切な務めです。祭司たちは人の目につかないようにそれを覆い、コラたちはその覆い隠されたものを慎重に次のところまで運ぶという責任が与えられた。でも彼らはそれに満足しなかったのです。アロンとその子孫と同じように祭司になりたいといった不満を彼らは抱えていたのです。

3) 批判 12-14節

そして三つ目の問題は、コラとその仲間たちはこのリーダーたちに対して批判をするのです。12節「モーセは使いをやって、エリアブの子のダタンとアビラムとを呼び寄せようとしたが、彼らは言った。『私たちは行かない。:13 あなたが私たちに乳と蜜の流れる地から上らせて、荒野で私たちに死なせようとし、そのうえ、あなたは私たちに支配しようとして君臨している。それでも不足があるのか。:14 しかも、あなたは、乳と蜜の流れる地に私たちに連れても行かず、畑とぶどう畑を受け継ぐべき財産として私たちに与えてもいない。あなたは、この人たちの目をくらまそうとするのか。私たちは行かない。』」と。13節と14節に「乳と蜜の流れる地」ということばが繰り返されています。13節の「乳と蜜の流れる地」というのはエジプトのことです。彼らはエジプトから出てきたのです。14節に同じように「乳と蜜の流れる地」とあります。これは神様の約束の地カナンのことです。彼らは、私たちがエジプトから導き出してカナンに導き入れることもなく、この荒野で我々を死なせようとしている、なんてひどいリーダーなのだと言うのです。あなたたちはリーダー失格なのに、今もリーダーとして君臨している。なぜあなたたちに従う必要があるのかと。こうして彼らはリーダーたちを批判するのです。

彼らがどうして約束の地に入ることができなかったかは皆さんもよくご存じです。モーセの罪ではなく民の罪です。民が行こうとしなかったのです。でも彼らはリーダーであるモーセとアロンが悪いと、責任転嫁して彼らを責めているのです。私たちが気をつけないと、教会の中にあつて、リーダーが自分の理想でないからと言って、非難するかもしれない。まさに彼らがやったと同じように、彼らをさばいて退けようとするかもしれない。まず覚えなければいけないのは、それは神様がお喜びにならないことだということです。彼らはこうして神が立てられたリーダーたちに反抗したのです。

2. 「モーセの提案」 16-18節

そこで何が起こったのか16節から続けて見て行きます。モーセが16-18節で「:16 それから、モーセはコラに言った。『あなたとあなたの仲間のすべて、あなたと彼らとそれにアロンとは、あす、主の前に出なさい。:17 あなたがたは、おのおの自分の火皿を取り、その上に香を盛り、おのおの主の前にそれを持って来なさい。すなわち二百五十の火皿、それにまたあなたも、アロンも、おのおの火皿を持って来なさい。』」と、ある提案を与えます。それは、翌日ひとりひとりが自分の火皿の上に香を盛って主の前に立ち、主のみこころが示されるのを待ちましようというものでした。だれが正当な祭司なのか、だれが神が選ばれた者たちなのかを示してくださるようにと。コラもそれに同意して、コラとその仲間たちが主の前に立った様子が記されています。ここにある「会見の天幕」というのは幕屋のことです。神がモーセに命じて幕屋を立てなさいと言われ、そこで神様と民とが会見をしたわけです。神様は人々にご自身のみこころを示され、神の栄光を現わされました。その前に立って主のみこころを求めようというわけです。

3. 「示された神のみこころ」 19-40節

19-40節を見ると、主のみこころが示された様子がそこには記されています。

1) 「すべての者を滅ぼす」 21節

21節で主はモーセとアロンに告げて「あなたがたはこの会衆から離れよ。わたしはこの子どもたちどころに絶滅してしまうから。」と言われます。神はすべてのものを滅ぼすと言われたのです。そこで22節でモーセとアロンは主の前に立って民のためにとりなしをなします。22節に非常におもしろいことばがあります。「ふたりはひれ伏して言った。『神。すべての肉なるものいのちの神よ。』と、神様に対して少し変わった表現がされています。これはすべての肉、すなわちすべての人間のあらゆることを知っておられるお方という意味です。実はこの表現は聖書の中に2回しか出て来ないのです。この箇所とあと27:16です。モーセとアロンが神の前に申し上げたことは、神様、あなたは人間の心をすべてご存じで、確かにここにあなたに逆らう者たちがいます。でもそうでない者たちもいま

す。あなたはそのすべてをご存じではないですか？その人たちの心をご存じではないですか？と言ってとりなしをなすのです。

2) 「反乱者へのさばき」 23-40節

その時、神様が何と言われたかは23節から出て来ます。この反抗する者たちに対するさばきを告げられるわけです。そしてモーセはその神様からのメッセージを人々に告げます。

(1) 「コラとダタンとアビラムへのさばき」 31-34節

最初に告げられたことはコラとダタンとアビラム、この三人の者たちに対するさばきです。25節から「:25 モーセは立ち上がり、イスラエルの長老たちを従えて、ダタンとアビラムのところへ行き、:26 そして会衆に告げて言った。『さあ、この悪者どもの天幕から離れ、彼らのものには何にもさわらな。彼らのすべての罪のために、あなたがたが滅ぼし尽くされるといけないから。』」、そこで人々がそこから離れた様子が27節に出て来ます。そしてモーセは彼らにこう言います。もしあなたたちが普通の人々と同じ死に方をしたとしたら、神様が私を遣わしたのではないと。でももしあなたたちがあり得ない方法で、彼が言うように地が口を開いて生きたまま飲み込むような死に方をするのだったら、あなたたちは主が私を遣わしたことを、そしてあなたたちが主を侮ったということを知らなければいけない。30節にその話が出て来ます。

そして31-33節「:31 モーセがこれらのことばをみな言い終わるや、彼らの下の地面が割れた。:32 地はその口をあけて、彼らとその家族、またコラに属するすべての者と、すべての持ち物とをのみこんだ。:33 彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅び去った。」、あり得ない方法でこの人々を地は飲み込んでしまったということが記されています。彼らは神を侮り、このすべてのものを支配しておられる神様に彼らは敬意を表さなかったと言っています。尊敬のかわりに侮った、軽蔑です。その証拠に神が言われたことを彼らはそのとおりに受け止めようとはしませんでした。彼らの考えたこと、また選択したことは神のみこころではなくて、自分たちの考えに沿って歩むことでした。ですから彼らは神に対する愛も恐れもまた尊敬も持っていなかったことは明らかです。そこでモーセは「主を侮ったことを知らなければならぬ」と言うわけです。

驚くべきことはこのコラと数名の者たちだけではなく、その家族が滅んでいる。なぜならその家族も恐らくこういった間違っただけの影響を受けたのでしょうか。もしかしたらきのうきょうこういった問題が発生したのではなくて、コラはこういう思いをずっと持っていたかもしれない。そうすると、家庭の中においてもそういう批判がいつも口から出ていたかもしれない。悲しいですが、この地はそういう影響を受けた妻や子どもたちをも飲み込み、神様のさばきが彼らの上を下ったのです。

(2) 「選ばれたイスラエルのリーダーたちへのさばき」 35節

彼らだけではなく、選ばれたイスラエルのリーダーたちへのさばきも起きていることが35節に「また、主のところから火が出て、香をささげていた二百五十人を焼き尽くした。」と出て来ます。この250人も同じように火によって死に至ったことが記されています。

(3) 「イスラエル人のための記念」 36-40節

それらのことが起こった後、36節で主はモーセに告げてこれを記念にするようにと言われます。何をするかというと、「炎の中から火皿を取り出せ」と。250人の者たちが持っていた火皿を取り出して来て、その火皿を「打ちたたいて延べ板とし、祭壇のための被金」にせよと。そうすることによって人々がそれを見るたびにこの出来事を思い出す、教訓にしるすと言っています。こういう罪に対しては神様の厳しいさばきがあったのだということを忘れることがないようにと。

4. 「心が頑なな人たち」(教訓から学ばない人々) 41-49節

ところが41節から見ると、人々の心は頑なです。こういう出来事があったにもかかわらず彼らの心は開くことがなかった。41節「その翌日、イスラエル人の全会衆は、モーセとアロンに向かってつぶやいて言った。『あなたがたは主の民を殺した。』」と。信じられないでしょう？彼らがさばきに遭ったのは彼らが神の前に罪を犯したからです。ところがこの民は彼らが死んだのはモーセ、あなたたちのせいだと言うのです。神のみわざを見ていながら、彼らは神に対して心を開くことはなかったのです。彼らは罪を犯した者たちよりもこのリーダーをなお責め続けるのです。

そしてその後何が起こったのか——。49節「コラの事件で死んだ者とは別に、この神罰で死んだ者は、一万四千七百人になった。」、神のさばきを下ったのです。モーセたちが香を焚いて民の贖いをする事によって「神罰はやんだ」と記されています。しかしこのように神に逆らう者たちに対して、神様は確かに厳しいさばきを下された。それがこの民数記の中に記されている出来事です。

結論:

さてきょう私たちが見て来たことを少し整理してみましょう。

このコラと仲間たちは神がお立てになったリーダーたちに対して不満を抱いていました。そしてユダヤ人のリーダーたちに働きかけて、モーセたちに逆らわせようと働きました。彼らにはこのリーダーたちに対する尊敬が欠如していました。彼らの問題を見た時に次の二つのことを見ることができます。

1) 問題は、主のみこころ(みことば)への崇敬の念の欠如

一つはこの人々の根本的な問題は主のみこころ——みことばともいいますが——に対する崇敬の念の欠如です。私たちは当然神様が言われたことに服従すべき存在です。相手は神であり、我々の主人なのです。この方が言われたことに当然私たちは従って行く。それが神と私たちの関係です。この方は神であり、我々はこの方によって造られたものに過ぎない。ところが神様が言われたことであつたとしても、たとえ神のみこころであつたとしても、彼らはそれを重んじることがなかった。この神のみこころ、神のおことばに対する崇敬の念がない。神が言われた神の命令をだれか人間の命令であるかのように、軽く捉えている。

コラたちを見ると、ある人たちのことを思い出します。モーセの兄弟、ミリヤムとアロンです。特にミリヤムが神の前に「なぜモーセだけなのですか」と文句を言います。「我々も兄弟ではないですか。なぜモーセだけがこんな務めに」と。ご存じのように彼女はその後全身病気に覆われますが、神がミリヤムやアロンに対してこんなことを言われています。「彼(モーセ)とは、わたしは口と口で語り、明らかに語って、なぜで話すことはしない。彼はまた、主の姿を仰ぎ見ている。なぜ、あなたがたは、わたしのしもべモーセを恐れずに非難するのか。』(民12:8)と。実の兄弟たちがなぜモーセだけが特別な務めにとモーセを非難していたのです。明らかにわかることは、それはモーセが決めたのではなく、神がそのように定められたということです。そのリーダーに逆らうことはそれを定めた神に逆らうことだから、神様は彼らに戒めを与えられました。

新約の時代になっても同じことをみことばは私たちに教えます。「:12 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。:13 その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。」、I テサロニケ5:12-13です。神様がその働きに置かれた者たちだから、尊敬を払いなさいと。I テモテ5:17にも「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。」。旧約の時代も新約の時代も変わっていないのです。神がなされることに対して私たちはそれを喜んで心からそれを歓迎することです。もちろん、そこに罪があるなら別です。罪があるなら私たちはそのことを指摘することです。しかし、そうでないならば、神が立てられた者たちに対して、そのような態度をもって接して行くということが旧約でも新約でも教えられています。コラの人たちの問題は、立てられた者たちに対する尊敬の念がなかったことです。

申命記12:28に「**気をつけて、私が命じるこれらのすべてのことばに聞き従いなさい。それは、あなたの神、主がよいと見、正しいと見られることをあなたが行ない、あなたも後の子孫も永久にしあわせになるためである。**」と言っています。神様の祝福をあなたがいただきたいならば、神のみことばに従わなければいけない。残念ながら彼らにはそれが欠けていたのです。彼らは神様のみこころに対して、神のみこころが記されているみことばに対する尊敬の念が欠けていたのです。

2) 問題は、主が与えてくださった働きに対する満足の欠如

二つ目の問題は、主が与えてくださった働きに対する満足の欠如です。実はそのことを我々は見て来たのです。神様はいろいろな働きを与えてくださっています。新約のみことばを使えば皆さんはキリストのからだのどこかの部分に属するわけです。目かもしれないし、手かもしれないし、足かもしれない。みんな違う働きを持っているのです。でも残念ながらコラと仲間たちは神様から与えられた働きに満足していませんでした。なぜ満足しないかという、人と自分を比較したり、自分の理想と現実を比較するからです。まさにそういうことが歴史の中で繰り返されています。

例:

(1) アダムとエバ

一番いい例の一つはあのエデンの園です。アダムとエバはエデンの園に置かれていました。罪のない完璧な場所です。これ以上すばらしい場所は存在しないのです。神とともに交わることができた。神を悲しませることがない。神をたたえながら生きることができるすばらしい環境です。なぜ彼らはそこから追い出されたのか——。サタンは巧妙に彼の心に働いて、あなたがいただいているものよりも、もっとすばらしい祝福がほかにあるのだということを心の中に植え付けるのです。この木の実を採ったらあなたの目が開かれて神のようになりますと言われると考えるわけです。これを食べることによって、今の私よりももっと喜びを持って、もっと満足してすばらしい生活が与えられるのではないかと。我々信仰者もいろいろな誘惑を経験しているはずですが。多少世の中に染まってみてもそこにはすばらしい祝福があるのではないかと。だってみんな楽しそうだから。ずっと教会で生活して来て、確かにうれしいし満足もあるけれども、もっとすばらしい祝福が教会の外、世の中にあるのではないかと。悲しいことにアダムとエバはその誘惑に負けるわけです。そしてその祝福を失ったのです。与えられているものに満足するはずだったのです。最高のところにいたのです。

(2) イスラエル

もう一つの例はあのイスラエルです。何度考えても思うのです。彼らは神によって選ばれた特別な民です。彼らには一人の王がいるのです。創造主なる神ご自身です。ところが、彼らは預言者サムエルのところに行って、I サムエル8:5『**今や、あなたはお年を召され、あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。**』、ほかの国々と同じように私たちに王様を下さいと要求する

のです。自分たちが神によって特別な民とされているにもかかわらず、神ご自身が自分たちの王であるという祝福の中にいるにもかかわらず、彼らは外を見るのです。こうしてイスラエルは大きな罪を犯しました。主はサムエルに「この民があなたに言うとおりに、民の声を聞き入れよ。それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのである」(Ⅰサムエル8:7)と言われました。今私たちはこうして冷静に考えるとなんて愚かな選択をしたのかと思いますが、彼らにとってはそれがベストだと思ったのです。確かに神が私たちを支配してくださっている。でも、少しぐらい世の中と同じようにできたら、今よりもっとすばらしい何かがそこにあるのではないかと。今あなたはそういう誘惑に負けていませんか？

◎ 満足を得るために:

① 主に忠実に従うこと Ⅱコリント9:8

私たちが覚えなければいけないのは、満足というのは神だけがお与えにすることができるのです。だから私たちが本当の満足を得ようとしたら簡単です。一つ目にあなたはいつも主に忠実に従い続けることです。神様のおことばに従い続けることです。その時に神があなたに祝福を下さる。みことばはこう言います。「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて」(Ⅱコリント9:8)、本当の意味で満たされていると言えるのは、神があなたのうちに働き、あなたに祝福を与えてくださっている時です。その祝福をいただくために我々は神が喜ばれることを選択することです。みことばに従って生きて行くことです。満足はこの神だけが与えることができるのです。そのことを忘れてはいけません。

ソロモンはこう言っています。「金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収益に満足しない。」(伝道者の書5:10)と。どんなに富があったとしても、どんなに金銭があったとしても、それがもたらすのは一時的な幸せ、一時的な満足だけです。心からの満足は神だけがお与えくださるものです。だから、本当に満ち足りた生活をするために必要なのは、神が喜ばれることを選択することです。

② 主から与えられた恵みを覚えること:

もう一つ言えるのは、主から与えられた恵みといただいている祝福をいつも覚えることです。先ほど見たアダムとエバもそうでした。イスラエルもそうでした。すばらしい祝福をいただいているのに、すぐにそれを忘れてしまう。私たちもそういったことに陥りやすいのです。

信仰者の皆さん、我々はすばらしいことを神様に感謝できる。どんなことか——。

・「救い」 ルカ10:20

まず言えることはあなたの名前が天に書き記されていることです。あなたの名前はもう天のいのちの書に記されているのです。つまりあなたは死んでも生きるのです。神様はそのような祝福を私たちに、そしてあなたに与えてくださっている。それは、神様がすばらしい祝福としてあなたに与えてくださったものです。あなたはそれをいただいたのです。それを感謝しながら我々は生きることができます。

・「必要は必ず与えられる」 マタイ6:8;ピリピ4:19

同時に神様はあなたにすばらしい約束を下された。それは、あなたの必要は必ず神様が満たしてくださるということです。「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に(願うより前に)、あなたがたに必要なものを知っておられるから」(マタイ6:8)と。感謝なことあなたに神様に願う前、神様にお伝えする前に何があなたに必要か神様はもう知っている。そしてパウロはピリピ4:19に「あなたがたの必要をすべて満たしてくださいませ。」と書いています。私たちの神様は我々の必要を全部ご存じだし、そしてあなたの必要を満たしますと言われた。全能の神がそう言われているのです。この約束はあなたに与えられたものです。

・「全知全能の神が常にとともにいてくださる」 申命記31:6、8;ヨシュア1:5;Ⅰ歴代誌28:20;ヘブル13:5

そしてもう一つ、神様があなたとともにいてくれると言うのです。恐らく皆さんはヘブル13:5「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」ということばに慰めを得ているはず。神はいつも私とともにいてくださると。神は私を決して見捨てることがない、いつもともにいてくださると。でもこれはヘブル書の著者が初めて言ったのではないのです。実はこの約束は旧約聖書の中に何度も繰り返されています。

まずモーセに死が近づいていました。モーセはこれから約束の地に入っていくイスラエルの民に対して「主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。」(申命記31:8)と言いました。モーセが亡くなった後、主ご自身がヨシュアに対して「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」(ヨシュア1:5)と言われました。神ご自身の約束です。あなたを見捨てない、あなたを見放すことはない。

そして死期が近づいていたダビデがこれから神殿を建てようとする息子のソロモンに対して「強く、雄々しく」ありなさいと言うのです。「神である主、私の神が、あなたとともにおられるのだから——。主は、あなたを見放さず、あなたを見捨てず」(Ⅰ歴代誌28:20)とダビデは言っています。

モーセが民に与えた約束、神がヨシュアに与えた約束、ダビデがソロモンに与えた約束、そしてこの新約のヘブル書が与えた約束、我々に同じメッセージを与えてくれるのです。信仰者の皆さん、あなたに告げる。神はあなたを離れず、あなたを見捨てない。どんな時にもあなたとともにいてくださると。こんなすばらしい祝福を私たち

はいただいているのです。どこに行こうと、眠っていようと、神はあなたとともにいてくださる、この方は全能の神様です。それを考えるだけでありがたいと思いませんか？この約束はだれかではなく、私とあなたに与えられているのです。まさにみことばが言うように衣食があればそれで満足すべきです。だって私の必要は全部神がご存じであり、ちゃんと必要を与えてくださると。まだ私にこれがない、あれがない、あの人のようにあれを持っていない、これを持っていない。人と比較するのをやめることです。神があなたに下さった祝福を覚えて感謝することです。この約束に立つことです。でないと、いつまでたっても神が与えてくださった満足を持って生きることはないのです。与えられているものを感謝することです。与えられた約束を感謝することです。そして与えられた神様を感謝することです。その方があなたとともにいてくださるのです。

◎「示された神のあわれみ」：コラの子たち 民数記26:11

さて最後にコラの話に戻ります。実は詩篇の42篇、44-49篇、84-85篇、87-88篇をある人たちが記しています。聖書の下のところ「コラの子たちの賛歌」と書いてあります。「コラの子たち」というのは、今滅ぼされたコラの子孫たちです。確かにコラと仲間たちは滅びました。ところが民数記26:11は「しかしコラの子たちは死ななかつた。」と言います。神のあわれみがあったのです。そして彼らがこんな歌を歌うのです。詩篇84:10「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。」と。彼らはちゃんとレッスンを学んだのです。自分の先祖たちが大きな罪を犯して神様からさばかれた。そのレッスンを学んで彼らは神に従う者になった。その結果、神様はあわれみを持って彼らを用いたのです。コラ族は主の宮において門衛や歌うたいとして奉仕をしているのです。それを喜びながら。

私たちも神様があなたを救ってくださったこと覚えて、神様はあなたを用いてくださると。すべてのことを感謝しながら喜んで主に従い続けて行くことです。神は確かに罪をさばかれるお方です。しかしあわれみ深いお方です。我々がその罪を心から悔い改めるなら神様はその罪を赦してくださる。新しい出発はいつでもあるのです。今から始めることです。「主よ、残された人生をあなたに忠実に従って行きたい」と、「みことばに従って生きて行きたい」と。もうゴールが目の前にあるのに、立ち止まるのではなくて走り続けて行きたいと。そうやって我々信仰者は生きて行くはずで。信仰者の皆さん、そうやって生きて行きましょうよ。神は私たちを救ってくださった。生まれ変わらせてくださった。そして忠実に従うことによって私たちがこの神がまことの神であることを明らかにするのです。ここにはまことの神がおられるということを明らかにするのです。それが私たちの務めです。それをするためには主に忠実に従うことです。どうぞそのように歩んでください。そのように歩むように神様は私たちに求めておられます。私たちがそのように歩むことによって、私たちの神様がどんなにすばらしい方かを見える形で人々の前に明らかにします。どうぞそうやって生きて行きましょう。そうやって生きて行くことが、私たちが救われた者たちの大きな務めです。

《考えましょう》

1. コラはどうして与えられた働きに満足しなかったのでしょうか？
2. イスラエルが学ばなければならなかったレッスンは何でしたか？
3. ねたみに勝利するにはどうすればよいと思いますか？
4. 不満に対して勝利するにはどうすればよいと思いますか？